

## 研究室紹介

# 静岡県農林技術研究所果樹研究センター

静岡県農林技術研究所果樹研究センターの前身である静岡県柑橘試験場は、昭和15年に、カンキツを対象とした公設研究機関として旧清水市駒越に創設されました。その後、昭和23年には、落葉果樹の研究拠点となる西遠果樹分場が浜松市に設立され、以後組織改編を経て、平成19年に県農林技術研究所果樹研究センターとなり、常緑果樹および落葉果樹に関する課題に取り組んでいます。平成27年には、落葉果樹科と施設統合し、静岡市の基盤整備事業により整備された茂畑地区に移転しました。

当センターは、静岡市の中心部から約18km離れた標高約230mの場所に位置し、周辺は5か所の基盤整備地区があるカンキツ産地です。所内圃場では、温州ミカンをはじめとするカンキツのほか、ナシ、カキ、キウイフルーツ、イチジク、ブルーベリーが栽培されています。病害虫担当の研究員は3名（病害1名、虫害2名）で、土壌肥料担当の2名を加えた計5名により果樹環境適応技術科を構成しています。



図-1 果樹研究センター全景

当科ではこれまでに、県内で問題となる果樹病害虫の対策技術開発、特に天敵をはじめとする持続可能な防除技術の開発に取り組んできました。近年では、①ドローンを活用した急傾斜地カンキツ園の農薬散布技術、②ミカンハダニの薬剤抵抗性の評価、③温州萎縮病の耐病性台木系統の選抜、などの課題に取り組んできました。令和5年度からは、本県の新成長戦略研究課題「温州ミカン栽

培の超省力、超多収、高収益を実現する片面結実法の開発」のプロジェクトの中で、土着天敵や樹上微生物相を活用した省農薬管理体系の構築について研究をすすめています。虫害分野では、ハダニ類の有力な土着天敵であるコウズケカブリダニについて、代替餌の供給などにより密度を維持、向上させて効果を高める技術開発に取り組んでいます。病害分野では、近年増加傾向のカンキツ黒点病を対象に、感染源となる樹上の枯枝の孢子溢出量や、枯枝上の微生物相に着目、解析を行い、発病リスクを低減する有用な微生物相を検討していきます。こうした取り組みにより、防除薬剤の使用低減や、防除の適正化を目指しています。



図-2 所内カンキツ圃場でのドローン散布試験

また、同じく令和5年度より開始したみどりの食料システム戦略実現技術開発・実証事業のうち農林水産研究の推進（委託プロジェクト研究）「園芸作物における有機栽培に対応した病害虫対策技術の構築」に参画し、国産カブリダニ製剤の開発の課題にて、カンキツにおける製剤評価と利用法の検討に取り組んでいます。

研究以外の業務では、県内農協等と連携した栽培暦の見直しや防除講習会での指導、新農薬登録実用化試験の実施、発生予察調査、病害虫診断対応などがあります。最近では、病害虫の発生消長の変動や、基幹防除使用薬剤の失効への対応など、現場からの要望も多くなっています。今後も当科では、栽培現場や関係機関と協力し、果樹産地に役立つ技術および知見の蓄積に努めていきます。

（上席研究員 石井香奈子）